

杉沼 秀七（すぎぬま・ひでしち）

1、プロフィール

青森県のプロレタリア詩の代表的詩人。アナーキズムの影響を受け、その後プロレタリア運動を行う。代表的な詩に「橋」「藻川村」がある。

<生没>

1903(明治36)年11月19日 ~ 1992(平成4)年5月2日

<代表作>

『杉沼秀七詩集』

詩集『壺』

<青森との関わり>

弘前市百石町に生まれる。弘前市に居住し、プロレタリア運動を行い、プロレタリア詩・評論などを発表。

2、作家解説

詩人。明治36年弘前市百石町に生まれる。弘前市第一大成尋常小学校入学。黒石尋常高等小学校に転校、同高等科1年修了。青森市の菓子屋に奉公、童謡・詩などを好んで読むようになる。弘前偕行社・弘前区裁判所給仕をし、大正10年上京、給仕などの傍ら、正則英語学校・大原簿記学校に通う。この頃、書きまとめた童謡を持参して、民衆詩派の詩人、福田正夫を訪問。13年西洋料理修業のため上京、14年帰郷し、五所川原町に住み、「西洋新報」に詩などを発表。15年上京し、アナーキズムの影響を受け労働運動社に出入りする。帰郷し、昭和3年弘前市に住み、小野くに子と結婚。「弘前新聞」「東奥サンデー」などにプロレタリア詩、評論などを発表。プロレタリア詩人として注目される。4年プロレタリア文化運動を始める。文芸総合誌「座標」に詩を発表。プロレタリア詩誌「街頭に詩を焚く」発刊。5年『前衛書簡集』出版、発禁検挙。プロレタリア詩誌「詩戦」発刊。6年『青森県プロレタリア詩集』を古川英雄・工藤善助と発刊、発禁となる。プロレタ

リア運動のために、この後たびたび検挙される。7年プロレタリア詩を多数発表。「橋」は『日本プロレタリア詩集』に転載される。8年プロレタリア詩同好者と「雑草社」を結成、「弘前新聞」文芸欄を発表の場として、プロレタリア詩を書く。10年プロレタリア詩「橋」が『1935年詩集』に掲載。11年北津軽郡藻川・三好村の凶作を題材にした詩「藻川村」を発表し、検挙される。12年「東北文学」事件で、沙和宋一・下山俊三らと共に検挙される。「プロレタリア文学断念」の一札を取られ、以後敗戦まで詩作を断つ。19年警察特高課からプロレタリア詩および関係文学書の焼却を命ぜられる。戦後、弘前青果荷受商業組合理事長・弘前中央青果(株)社長・弘前駅前食料品市場理事長を歴任する。29年『杉沼秀七詩集』刊行(戦前詩篇42・戦後詩篇57を収録)。41年詩集『壺』刊行(戦前詩篇1・戦後詩篇109を収録)。平成4年5月2日死去。

3、資料紹介

○『杉沼秀七詩集』

図書

1954(昭和29)年1月1日

183mm×130mm

昭和29年1月1日発行。自費出版。発行所弘前文学会。内容は戦前の詩篇42篇(昭和3～12年)・戦後の詩篇57篇(昭和21～28年)を収録。序文竹内俊吉、「今年の詩壇」佐藤陸郎、「杉沼秀七論」須藤文蔵の記事などがある。戦前の詩篇は杉沼のプロレタリア詩の全貌をほぼ概観できる。